

## 仙川教会礼拝説教

2023年2月12日

吉岡光人（吉祥寺教会）

「道を整えられる主」

ヨブ記 2章1節～10節

使徒言行録3章1節～10節

「神の言」は命の言です。そして神の言は、「出来事」となる言です。神が語られると「光」ができ、世界が形づくられました。神の言によらずにできたものは何一つなかったとヨハネ福音書には書かれています。神の言は命を生み出すのです。そしてその日も、神の言は驚くような形の「出来事」となりました。

エルサレム神殿の一つ「美しい門」のそばに、生まれつき足の不自由な男の人が運ばれてきました。この人は毎日、門のそばで、礼拝に来た人たちに施し物もらって、日々の収入を得ていました。今のように行政の保護を受けることなどできなかった時代ですから、生きる唯一の手段は、人々からの施しだったのです。この男の人は、生まれながらに足が不自由だったと書かれていますから、生まれてからその日まで、このようにして生きるしかなかったわけです。

そしてその日も、いつものように男は「美しい門」に座っていました。そして彼の前を無数の人が通り過ぎてゆきました。彼らはみな、神に祈りを献げる人、そして神に感謝の献げ物をする人たちでした。つまり彼らはみな、神に心を向けている人たちでした。

しかし多くの人々は、毎日そこにいた、足の不自由なこの男の人の存在には目を留めずに、そこを通り過ぎて行ったのです。もちろん中には、ちょっと立ち止まり、懐からいくらかのお金を取り出して彼の前において行った人もいたでしょうが、多くの人にとって彼は、視野に入っていなかったのです。

ところがその日はそれまでと様子が違っていました。二人の若者が彼の前を通り掛かりました。足の不自由な男の人は、いつものように彼らに施しを求めました。するとこの二人は彼のことを「じっと」見ました。そして、そのうちの一人、ペトロは突然こう言ったのです。

**「わたしたちを見なさい」**

自分のことを「じっと見つめ」てくれる人でしたから、奮発して、たくさん施しをくれるかも？彼は一瞬そう思ったかも知れませんが、ところが、その後聞こえてきた言葉は、意外な言葉でした。

**「わたしには金や銀はないが、持っている物をあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」**

「え？お金をくれるんじゃないんですか」と思ったことでしょう。「ナザレのイエス？」「はて？誰だろう」。「その人の名によって立ち上がりなさい？」彼はペ

トロが何を言っているのか理解できなかつたに違いありません。もしかすると「ナザレのイエス」という名前だけは、神殿を歩き交う人々が互いに交わす言葉を小耳にはさんでいて知っていたかも知れません。「少し前に、エルサレムで死刑になった人が、そんな名前だったかな。」と思い出したかも知れません。しかしその名前が自分とは何のかかわりもないと思っていたたずです。いずれにしても、彼は期待していたものを得られず、「わたしには金や銀はない」言われたので、がっかりしたことでしょう。

ところが次の瞬間、とても信じられない、しかし、とてつもなく素晴らしいことが彼の身に起きました。ペトロが彼の右手を取って引き上げると、彼は立つことができたのです。しかもそれは、ほんの一瞬の間だけのことでなく、くるぶしがしっかりして、躍り上がることができるほどでした。「金や銀はない」と聞かされてがっかりしたその直後、彼は、今まで一度も経験したことの無い、素晴らしいことが自分の身に起きたことを知ったのです。

こうして神からの素晴らしい贈り物をいただいた彼は、その喜びを全身で表しました。そしてペトロとヨハネの二人と一緒に境内に入って行きました。自分の足でしっかりと立つことができるようになって、最初にしたことは、神の前に進み出て神を賛美することだったのです。彼の口からは神への感謝する賛美の言葉が溢れ出ていました。その光景は周囲の人々が「我を忘れるほど驚いた」ほどの出来事だったと使徒言行録は伝えています。

この個所、ペトロと足の不自由な男の人とのやり取りの中で、特徴的な描写がでてきます。それは、彼らの視線が細かく描写されている点です。足の不自由な男は、ペトロとヨハネが神殿の境内にはいるのを「見て」施しを乞いました。すると二人は彼を「じっと見て」言いました。「わたしたちを見なさい」と。男の人は何かもらえらると思って二人を「見つめている」と、ペトロが「金や銀はわたしにはないが・・・」と語り、彼の手をとって立ち上がらせました。このように、「見る」という動詞が何回も使われています。単に言葉のやりとりだけでなく、事柄のやり取りだけでなく、「目と目でコミュニケーションを交わした」、つまり「アイ・コンタクト」したことが細かく描写されているのです。

神殿に参拝するほとんどの人々は、この足の不自由な男の人の存在にはほとんど関心を向けていませんでした。いくらかのお金を与える人もいたことでしょうが、彼の「存在」そのものに関心を向ける人は一人もいなかったのです。まして彼の「痛み」や「嘆き」を知ろうとした人々は全くいなかったのです。しかし、ペトロとヨハネの二人だけは違っていました。彼らはそんな彼の存在に関心を向け、関わろうとしたのです。

この足の不自由な男は、働く手段を持ち得なかつたという生活上のハンディがあったことは言うまでもありませんが、それだけでなく、その障害を負った自分の人生は、神の祝福を受けているものとはとても思えない、むしろ神に呪われているのではないかと心の深いところまで傷ついていたということが想像されま

す。現代の言葉で言えば「スピリチュアル・ペイン」を抱えて生きていたのです。しかし今、彼は、自分が生まれてきた意味、今日まで生きてきたことが無駄ではなかったことを知ることができた、身体のみならず心の奥底から彼は癒されたのです。

二人のキリストの弟子たちは表面的な癒しや慰めは約束しませんでした。神を信じれば願ったことがかなうとか、金銀がたくさんもらえるととか、そういう保証もしませんでした。しかし、彼らはもっと素晴らしいもの、決定的な贈り物をしたのです。それが「イエス・キリストの名」だったのです。

自分の存在の意味を失いかけて生きている人々に「生きる意味、生きる喜び」を示したのです。「私は生まれてきてよかったのか?」「私は生きてきてよかったのか?」「私の人生は呪われているのではないか?」そうした、自分の存在そのものを疑って生きなければならない人、深い嘆きの中を生きなければならない人に、「そうではない。あなたは生まれてきてよかったのだ。生きてきてよかったのだ。神様はそのことを祝福してくださっているのだ」と示すこと、二人の弟子はそのことを主から託されたのです。そしてそれを伝えた時、言葉は出来事となったのです。

聖書の奇跡の話はそういう意味を私たちに伝えていきます。こうして神はわたしたちのうちに出来事を起こされることを通して一人一人の人生の道を整えてくださいます。「道が整えられる」ということは、自分が思い描いた人生の道に行くことでもなく、他人が描いた人生を生きることもなく、その人に相応しい道を神が用意してくださるということです。キリストに従う者たちは、このことを信じ歩んで行くのです。そしてその事実を人々に伝えるのです。そして、神から託されたこのメッセージが人々に伝えられる時、神の言葉は人々の間で「出来事」となるのです。

今日も私たちは神に愛されて、生きることを「よし」とされています。神の祝福の中を生きているのです。そのメッセージを受け取る時、わたしたちに中に新しい「出来事」が起こっています。その出来事の中を生きて行くこと、それがキリスト者にとっての「幸せ」であり、「生きる意味」を確かにすることです。神に愛され、神に呼びかけられ、神に見つめられていることを心から喜び、「ナザレの人イエスの名」によって立ち上がり、感謝の内に生きて参りたいと思います。